

千代田まちづくりサポート



# 10周年記念事業

## 『企業との新たなつながり』

New connection with enterprise



主催 財団法人まちみらい千代田

協力 社団法人日本フィランソロピー協会  
プラットフォームサービス株式会社

# 10周年記念事業

## 『企業との新たなつながり』

New connection with enterprise



### Contents



千代田まちづくりサポート10周年記念事業

### 『企業との新たなつながり』

01~20

日時：2008年11月15日 13:00~ 場所：ちよだプラットフォームスクウェア（5階会議室）

■理事あいさつ 長田 貴雄

■基調講演

「企業が組みたい相手になるために」

高橋 陽子 氏（社団法人日本フィランソロピー協会理事長）

■卒業グループの発表

発表グループ

江都天下祭研究会 神田倶楽部

NPO法人都市住宅とまちづくり研究会

NPO法人コドモ・ワカモノまちing

千代田区こども110番連絡会

CAPPS（キャップス）

コーディネーター

鈴木 伸治 氏（横浜市立大学国際総合科学部准教授）

コメンテーター

高橋 進 氏（三菱地所株式会社 CSR推進部参事）

滝川 潔 氏（富士ゼロックス株式会社 CSR部社会貢献推進グループマネージャー）

田中 恭一 氏（財団法人トヨタ財団 地域社会プログラム シニアプログラムオフィサー）

布川 真理子 氏（株式会社大和証券グループ本社 CSR室課長代理）

■表彰式

■コーディネーター・コメンテーター総評

■閉会のことば 副理事長 川崎 侑孝

### 懇親会

日時：2008年11月15日 17:00~

場所：ちよだプラットフォームスクウェア（1階プラットフォームカフェ）

21~23

■開会あいさつ 長田 貴雄

■来賓あいさつ 石川 雅己 様

■乾杯 鈴木 伸治 様

■来賓あいさつ 山本 坦 様

■締め 田熊 清徳 様

### 交流コーナー

24~25

### 寄稿

「記録者としてのこの10年から」 編集室風葉舎 柏原 怜子 氏

26~27

### 賛助会員一覧

28

## 千代田まちづくりサポート10周年記念事業

## 『企業との新たなつながり』

## ■理事長あいさつ

本日はお忙しいところ「千代田まちづくりサポート10周年記念事業」にお越しいただき、誠にありがとうございます。

「まちづくりサポート事業」は、今年で10年目を迎えることになりました。これまでの10年間で助成金額が約4,000万円、助成した団体は延べて146団体になります。ここまで続けて来られましたのも、皆様の千代田のまちを元気にしようという熱い想いの賜物ではないかと、深く感謝を申し上げるところでございます。

この10周年記念事業を計画するにあたりまして、これまで助成を受けた団体の方にアンケートを行いました。その結果については隣の交流コーナーに展示しておりますので、ぜひご覧いただきたいと思っております。それを拝見いたしますと、多くのグループが卒業後もそのまま活動を展開されております。当然知名度が上がって、活動範囲も広がり、そして参加人員も増えてきたということで、地域に根ざした活動が行われている様子が伺えます。しかしまた一方で、やはり資金の不足、人材の不足という面で非常に苦労されている様子も伺えます。

そのため、やはり必要なのは「企業との連携」、「企業の地域貢献活動との連携」というものが非常に重要ではないかと考えました。そこで、この10周年記念事業にあたりまして、日本フィランソロピー協会理事長であります高橋陽子先生に「企業が組みたい相手になるために」ということでご講演をいただくことにいたしました。また、卒業後も苦労しながら活動を続けられている先輩グループの方々に、現在の活動状況を発表していただくことにしております。ぜひ皆様もそれを聞かれまして、今後の活動の参考にいただければと思っております。

まちづくり活動への支援というのは他のところでも、いろいろ行われております。しかし「千代田まちづくりサポート」は、運営資金に税金を使っておりません。まちづくりに非常に熱意のある企業、あるいは個人の方の賛助会費で賄われているということが、特徴に挙げられると思います。これは全国的に見ても唯一の事業ではないかと思っております。この素晴らしい事業を今後も継続して、皆様方の活動が少しでも千代田のまちを元気に



していききっかけになればと思っております。

またこれまでの事業運用にあたりまして、ご協力をいただいております千代田まちづくりサポーターズクラブの皆様方に厚く御礼を申し上げますと共に、ぜひ皆様方もサポーターズクラブにご参加いただきまして、ご支援を賜ればと思っております。

最後にこの10周年記念事業開催にあたりまして、ご協力をいただきました日本フィランソロピー協会様、プラットフォーム株式会社様に厚く御礼を申し上げまして開会の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

平成20年11月15日  
理事長 おさだ たかお 長田 貴雄

※長田前理事長の後任として、12月25日より、若林 尚夫 (わかばやし ひさお) が、当財団の理事長に就任いたしました。

## ■ 基調講演

## 「企業が組みたい相手になるために」

社団法人日本フィランソロピー協会

理事長 高橋 陽子 氏

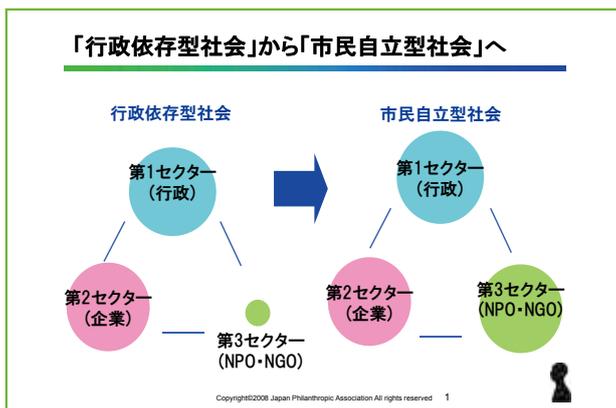
皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました、日本フィランソロピー協会の高橋です。私どもは1991年から、企業の社会貢献や、CSRの推進をしています。

今回千代田まちづくりサポートが10周年ということで、本当におめでとうございます。今理事長が、これは民のお金だと、税金ではないんだとおっしゃいましたが、ここが本当に素晴らしいと思います。私どもも社団法人ですが1円も行政のお金、補助金はいただいておりません。ですから本当に民間企業の会員、個人の会員から会費をいただいて、あるいは事業をして、ほそぼそとやっております。

今日は、いただいたお時間で、「企業が組みたい相手になるために」ということで、「Ⅰ.企業とNPOが組む意味」「Ⅱ.企業とNPOとの協働事例」「Ⅲ.信頼されるNPOになるための10カ条」、こんなお話をさせていただきます。

## Ⅰ. 企業とNPOが組む意味

まさに今、時代が変わってきているんですが、そういう中で今までの私たちは、どちらかというと「行政依存」の中にいました。制度も法律もそうでしたし、私たち自身も「行政に税金を払えば、行政が何とかやってくれる。あとは経済活動を、企業をはじめ民間が頑張ればよい」と考えていた、その考えの中で、今日の繁栄があるといえると思います。ただ、今環境問題が深刻になり、価値観も多様化して、いろいろな問題が増え、変化が激しく起こっています。そういう中で、従来の第1セクター



(行政) や第2セクター (企業) だけではどうにもならないというのは、私たちがよく分かっているところです。ですから、行政や企業だけではなくて、民間も何か果たせるのではないかと、民間が果たす公益があるのではないかと、今、市民が自立していく、そういう社会にしていこうという流れにあると思います。

期待は「市民自立型社会」です。いわゆる健全な社会というのがこの3つ、行政、企業、そのカウンターパート (受け入れ担当機関) としてのNPO、NGO、いわゆる市民セクターです。「市民自立型社会」に対する期待はとても大きいですが、実態はやはりまだ「行政依存型社会」です。これは、やはり財政、財源の問題が一番大きいのではないかと考えています。

お金は足りない、楽しくやればよいというものもあります。そういうところがまたNPO、NGOの元気なところではありますが、やはりきちんと社会の変革の担い手となるためには、期待に即した力も付けなくてはなりません。ですから、今までの形ではなく、企業 (企業人) も社会の一員として、NPO、NGOをきちんと育てていかなくてはいけないと言われていきます。

私は今の日本の問題は、「たこつぼ」社会だと思っています。企業は企業という社会、同じような業界、それから学校、行政、NPOも案外そうですが、皆それぞれの「たこつぼ」に入って、そこの常識で動いているところがあります。ただ、今この地域社会というフィールド、ここでいえば千代田区というフィールドに「たこつぼ」から出てく

ると、現場が見えるし、現実が見えるし、いろいろな人が見えるしということで、ここに出ていくのが大事なのだろうと思います。きっと千代田まちづくりサポートは、そういう出るお手伝いをしていたから、そしてまた皆さんがどんどん出てきたから、10周年を迎えることができ、そして卒業生の皆さんがこれだけ発展したのだと思います。「たこつぼ」から出ようというのが私のメッセージです。

今企業がどういうことをしているかということ、社会貢献やCSRなど、単なるPRではない活動を結構しています。それで今求められているのは何だろうと考えると、一つはその「たこつぼ」から出るという意味で、「社員参加」がキーワードになっています。「社会参加」（社会貢献、ボランティア）を皆ですること、人間としての共感を得ることができ、チームワーク力が付くということが、意外と大きな目的になっています。チームワーク力をつけることによって、社長と平社員や、部長や課長という立場に関係なく、フラットな人間関係を保つことができ、風通しのよい風土がつかれるといわれています。風通しのよい風土ができると、いろいろなリスクヘッジ（リスクの回避・低減）になるわけです。

それと「本業活用」。社内で理解され、本当に力を出しやすいのは、本業ではないかということで、本業を生かした社会貢献は結構行われています。

それから「NPOとの協働」。これは今日のテーマにもなりますが、企業の方は「たこつぼ」から出ようといっても、普段の中では現場のことが分からないので、NPOの方々と協働していきたいと考えています。例えば、損保ジャパンの福祉財団は、NPO法人設立のために必要な資金を提供しています。立ち上げというのは非常に不安定なので、そういうところに資金助成しようというのは、ありがたいことです。ただ、どこと組めばいいか分からないという企業も現実にあります。

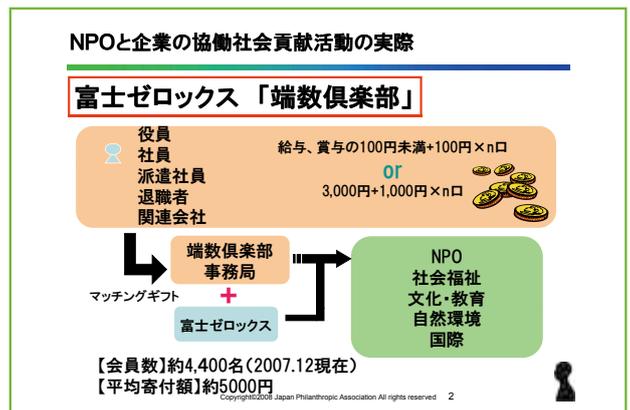
## II. 企業とNPOとの協働事例

先ほど「社員参加」と申し上げましたが、フィランソपी協会では企業の社会貢献を推進するときに、お金を出しませうということではなくて、社員の方が一市民として何か動けるようにサポートしましょう、ということをご提案しています。

株式会社富士ゼロックスの「端数倶楽部」は、その先駆けだと思います。「端数倶楽部」とは、社員の給与の

うち100円未満の端数（34円や52円など）を自動で天引きにし、集まったお金を寄付をするという仕組みです。現在は50社程度の企業が、この活動を行っているようです。

さらに富士ゼロックスでは、マッチングギフトという制度があり、例えば、社員のお金が500万円集まったら、あと500万円会社が上乗せするという仕組みをつくられました。今4,400人ぐらいが参加しており、1人年間5,000円ぐらいになると伺っています。委員の方が社員の中から出られて、いくつかの分野に分かれ、どういうところに寄付しようかと検討する、そういう仕組みで行われています。ですから、これは会社が出すというよりも、社員一人一人の志、一人一人はほんの少しだけど、仲間が集まって、会社も一緒になってということをやっているそうです。



アサヒビールでは今ワンビール、ビール1杯を節約して寄付しようという活動がありますし、1口100円で寄付を募るといったものも、増えてきています。

私が以前個人的にお手伝いしていたのが、フィリピンの日比混血児を支えるネットワークです。お話しをしてみると、なかなか家賃も払えないという状況だったんです。そこでフィリピンで事業をしている商社などに声をかけてみたのですが、無理だと言われてしまったんです。

このお話を端数倶楽部の事務局の方にしたら、今年は国際と子どもというテーマにしているからということで、端数倶楽部のメンバーから15万円、会社から15万円で合計30万円をいただくことができました。すごくありがたくて。こういうように、皆がやりやすいところで富士ゼロックスがしたら、あそこがやるんだったら大丈夫だ、うちもやろうという、呼び水になるような活動をしようということをやっています。

他には今、企業が1社だけでやるというよりも、何社が集まってやるということもよくあります。虎ノ門にあるジャ

パンエナジーが声を掛けて、皆でフィリピンの子どもの支援をしようということで、古本市を開催しました。社員が自分の家からいらなくなった本を持ってきて、それを売る。ただ売るだけではなく、フィリピンのことに関する展示をしたり、コンサートをしたり、そういうイベントをして、NPO法人のチャイルド・ファンド・ジャパンに寄付をする。寄付金は、教育費などに使われています。

こういうふうに、企業は自分のところだけというよりも、それではあまりに少ないので、皆でやろうと呼びかけています。別の会社の人と一緒にやると、普段付き合いがない人たちと仲良くなれますし、全然違う企業の様子も分かるということで、社員に喜ばれているということです。

最後に、香川県に本社のある花園タクシーというタクシー会社があります。現在は全国に6社ありますが、これはもともと「わははネット」という内閣府からも表彰を受けた団体で、子育て支援をしています。お産で入院したいと思ったら、タクシーのドライバーに拒否されたり、子どもが病気で、お母さんがお仕事をされていて急に帰れないときに、どうしたらいいかということで、タクシー会社と契約をしてドライバーの研修を行い、「子育て支援タクシー」というものを作り、それで子どもの送迎などをやっています。

この活動を始めて、運転手さんのマナーが良くなったそうです。「子育て支援タクシー」をやっているのに、乱暴な口を利いたり、乱暴な運転はできないので、わざわざ研修をしなくても、社員研修になっていると。最初は香川県で始まったのですが、今は「全国子育てタクシー協会」ができて、いろいろな地域でも始まっています。



### Ⅲ. 信頼されるNPOになるための10カ条

今NPOの数は3万5,659団体と、内閣府の調査を見たら出ていました。すごい数ですが半分ぐらいがもう休眠しているともいわれています。やはり一番の問題は財政ではないかと思います。これは寄付の文化が育っていないことが大きいと思っています。

フィランソロピー協会では、「まちかどのフィランソロピスト賞」という、寄付をした方の顕彰事業をやっていて、今年で11年目になります。寄付をしている方は結構いますが、その人が悪口を言われたり、いろいろなことがあるので、なかなか広がりません。

アメリカは寄付のうち、4分の3以上が個人からの寄付です。4分の1が法人です。日本はちょうど反対、4分の3が法人、企業、あるいは財団からで、個人の寄付は4分の1以下です。ですから、これからNPO、NGOを最初に申し上げたようなセクターとして育てるためには、一方で寄付の文化をきちんと醸成していかななくてはいけないと思っています。ただ、これがあるからなかなかマネジメントに手が回らなかったり、何とかお金を得ないといけないからということで、周りとなかなかネットワークしにくいということが、やはり今課題であると思っています。

私も何もわからないところから始めたので、失敗もたくさんありました。そんな、これまでの失敗も考慮して、10カ条を作りました。

#### 【その1】NPOは使命が原点—ニーズに応える

NPOはノン・プロフィット・オーガニゼーション（非営利団体）の略ですけれども、これで勘違いされるのは、ノン・プロフィットだからプロフィットはいらないと、そうではありません。これはノット・フォー・プロフィットなんです。プロフィットのための団体ではない。では何かというと、フォー・ミッション。ただプロフィットは手段なんです。ミッション（使命）を果たすために、手段は絶対いるわけです。

でもNPOの神髄はやはりミッションを果たすためにあるわけです。これは放っておけない、この子をこのまましておけない、このおばあちゃんはこのままではまずいだろうと、この環境はこれじゃひどいと、その思いで、ここを何とかしなくてはいけないという使命が原点です。ですからフォー・ミッションなので、これは絶対揺るがしてはい

けないと思います。

この間、WWF (WWF Japan : 財団法人世界自然保護基金ジャパン) の方がおっしゃっていましたが、最近植林がはやっていて、ある企業からCSR報告書を会社で出さなくてはいけないので、今年は何万本、では来年は何十万本という数字が欲しいから、植林をやれと言われてきた人がいたそうです。WWFでは、「植林が目的だったらもうやめてください」、あるいは「うちは一緒に出来ません」と断ります、とおっしゃっていました。そこで、理解していただいなくても話し合っ、それから進めるということはもちろん良いのですが、そうではなくて、とにかく企業で何か成果を出したいというときには、やはりご自分の使命とうまく合わなければ、それはお断りすることが大事かと。むしろそこまでのものを持っている方が、結果的には信頼されると思います。

## 【その2】 NPOとPOの違いは not for profit for mission

では企業とNPOの違いは何かというと、「お金を内部留保しないこと」、それから「自分たちで分配しないこと」です。稼いだお金は次の活動に使うところが企業と違うことで、稼いでいいんです。ただ、なかなか稼げない。利益が出ないことも必要だと、ミッションがあると思っ、てやるわけですから、現実はなかなか稼ぎにくいんです。

## 【その3】 寄付依頼は普及活動

主婦や、営業活動をあまりしていない方には、企業に行っ、て、こういうことで支援を下さい、何十万円下さいと言いに行くのが、とても精神的に負担に思っ、る方が結構いるんです。

私も実際そういうところはありましたけれど、これはまず説明するわけです。こういう問題があっ、て、私たちはこういう活動をしていると。従っ、て、それにこういうお金が足りないの、でお金で支援していただく、あるいはこういうことで支援していただきたいということなので、寄付の依頼は普及活動なんです。パートナーシップですから、上下関係ではないわけです。やはり普及活動の一つであり、ファンドレイジング、資金調達であるという、寄付の依頼活動はそういうふうに通っ、て堂々としないと、本当に相手に伝わっ、ていかないの、で、卑屈になることはありません。

## 【その4】 NPOは財源のバランスが命

NPOを皆さんも経営していただい、るように、だいたい3分の1が寄付や会費や協賛金、3分の1が補助金や助成金、3分の1が自主事業で稼ぐ、というバランスがいいといわ、れています。多少バランスが、多かっ、たり少なかっ、たりはあるかもしれませんが、だいたいこの3つのバランスが、健全性の一つのバロメーターといわ、れています。

それはなぜかという、例えば補助金と助成金だけに頼っ、ていると、助成金が行政から出なくなっ、てしまっ、たときに、すごっ、くバランスを崩します。それから自主事業で全部できるとしたら、儲かることしかしてないの、で、それは企業と一緒に、す。ただ、ある程度自分で稼ぐということをしておかないと、人ばかり当てにしているのは怖い、です。それから寄付金だけで活動していっ、くとなると、本来個人の細かい寄付がずっ、とあるというの、が、非常に本当は足腰が強いんだと思っ、てますが、日本の場合にはなかなか難しいということもあるし、人の気持ちによっ、ていて、どう変わるか分からないの、で、NPOはいつも不安定なわけ、です。不安定なだけで、不安定さが信条なわけ、です。不安定さの弱さが強さであると思っ、てます。なので、このバランスはすごっ、く大事だと思っ、ています。

私なんかが行くと、偉い、です。偉い、です。偉い、です。偉い、です。頑張っ、てください、さようなら、となるわけ、です。なので、楽しそう、です。面白そう、です。自分も仲間に入りたい、と思っ、てもらわなくてはいい、ない。これは至難の業、です。でもそうやっ、て私たちは普及をしていっ、く、皆さんに知らせていっ、く、NPOにはそういう役割もあっ、ります。それと、寄付がなくなっ、たときに、ほかの代替の財源を常に持っ、ておかない、で、一つに片寄らない、バランスのいい複数の財源を持つことが大事だ、と思っ、ています。



### 【その5】泣き脅しより具体的説明を

いろいろなNPOの助成の選考をさせていただいて、このごろは本当にだいぶ皆さん、企画書がとてもしっかりやすくなっています。ですが中には、本当にこんなに大変、こんなに困って、こんなに一生懸命やっているが本当につらい、ということがだ一つと書いてあるのがあって、それでいったいなぜここにパソコンが必要なのかと、なぜここでこのお金が必要なのかというのが結構あります。その辺は、企業は出そうと思っている、あるいはそれが仕事で来るわけですから、むしろ具体的にきちんと説明することが大事だと思います。

最初に普及活動なんだということをきちんと思っていれば、わりと心が安定するんですが、そうではない気持ちで訪れると、ただでさえ何か自虐的な感じになってきて、引け目になるので、結果的に泣き脅しになってしまうことがあります。具体的にまずご説明をすることが大事だと思います。

### 【その6】相手が支援したくなる企画書を出そう

企業の方が皆企画書を作るのがお得意かというと、意外とそうでもないわけです。私の知っている元営業マンだった男性は、NPOをその後始められたんですが、相手の担当の方が上司に上げる企画書まで書いてあげたとおっしゃっていました。だから上司の人に上げやすい企画書、すなわちA4、1枚か2枚できちんと分かるような、そういう企画書を出す必要があります。

相手が支援したくなるというのは、相手が上に上げやすいし、説明しやすいということも大事なので、むしろ担当の方のサポートもするぐらいのお気持ちで。反対に言えば、その担当の方はこちらにそんな思い入れがあるわけでもないの、そういう方がきちんと説明できるということは、誰にでも分かりやすいということなので、具体的に分かりやすく簡潔に書くということは、それと同じことなんです。ですから、相手の立場になって企画書を書くことは大事だと思います。

### 【その7】報告は迅速かつ具体的に

お願いするときにはすごくエネルギーを使います。だからそれがうまくいったら、やれやれになって、何かできた

ら、もうそれがやれやれで、今度は次に行かなくてはいけないという、常に忙しくて大変なことを私たちはしていますので、案外報告がおろそかになる場合があるんです。これは人間関係でも何でも同じで、報告やお礼状など、そういうことはすごく大事だと思います。

しかももう本当に助かりました、ありがとうございましたと、気持ちばかり入れるのではなくて、具体的にこういう成果があった、こういう人たちが何人来て、感想はこうで、あるいは新聞にこういうふうに掲載されたという、そういう報告。それも早く。した方が良いというか、すべきだと思います。これは普通の人間関係と一緒にです。

### 【その8】断られても報告を

これが案外大事だと思います。いろいろなところをお願いに行くと、皆が皆応援してくださらない、断られる方が多いです。でも一応話を聞いてくださったわけだし、こういうことがあるということをお伝えしているわけなので、断られた方でもお願いに行ったところは、やはり報告をきちんと、直接行っても良いし手紙であっても、すべきだと思います。

すべきというのはなぜかということ、次につながる。心情的にはこれはいいと思っても、今年は予算がないから出せないという、そういう事情もありますし、一応様子を見て、実績を見て、それからしようということもあるので、1回断られたからといって本当にだめではないということも多いです。断られたところにちゃんと報告するのは、次の営業活動というか、支援をお願いすることにつながりますし、理解を深めることにもつながると思います。

### 【その9】資金調達は明るさと律儀さで

これは8番目と同じことですが、こういうことはやはり明るさが大事で、堂々と明るくというのがいいんですが、それでも堂々と明るくて、わっと終わったらだめ、今も申し上げたように、断られてもご報告を、寄付していただいたらお礼など、そういう律義さは、これは人間社会、仕事であろうが、ボランティアであろうが、家族であろうが、皆同じことだろうと。皆人情は同じですから、そういう意味では堂々と、そして律義にということなのかと。この人と一緒にやったら楽しそうだと思ってくださるかどうかは、結構大事なポイントかと思っています。

## 【その10】寄付をもらって感謝されよう

寄付をいただいて、こちらがありがとうと言うのは当たり前ですが、寄付を出した方からありがとうと言われるような活動をしなくてはいけないと思っています。これが一番大事なのか、理想形なのか、これがパートナーシップだと思えます。ですので、寄付をいただく、いろいろな協賛金をいただく、それでいい活動をすぐする。こちらもちろんありがとうだけど、出した側も、こんないい活動をしてきて、自分たちの代わりにこういうことをやってくれてありがとう、と言われることは大事かと思えます。

どうも、寄付ということに関して、すごく日本人というのはねじれた感じがあると思っています。1億円出したり、10億円出して新聞に載ると、うちの「まちかどのフィランソピスト賞」の事務局推薦をしようと思ってお電話するんです。そうしたら、そっとしておいてください、新聞に載ったために周りから文句を言われたり、たかられたり、ねたまれたり、すごく傷つくんだと。それは変だと。日本人はどうも、国としてお金を出してもちっとも評価されないし、個人でお金を出すより、何か汗をかいた方がレベルが高いように思われてしまいますが、私は違うと思っています。

何が違うかという、寄付は人に委ねるわけです。ひょっとしたらちゃんと使ってくれないかもしれない、だまされるかもしれないけど、信頼して委ねると。そして委ねられた方は、自分のことを信頼して委ねてくれたんだから、きちんとした活動をしよう、となります。そうすると、今度その支援を受けた子どもたちやお年寄りやいろいろな方は、自分は独りぼっちじゃないんだ、こうやって自分たちのことを考えて応援して、親身にしてくれる人がいるんだと思って、自分も何か役に立とう、頑張ろうというふうに循環します。

寄付とは、お金の信頼の循環を乗せて回すことだと思っています。信頼というのが一番、今の子どもたちから抜けていると思います。なので、寄付はすごく今、日本人に必要で、自分たちが元気になるためにも必要なものかと思っていますので、ぜひ皆さんも堂々と、資金調達の活動をなさっていただきたいと思っています。

二宮尊徳の格言で、これはいつも自分に言い聞かせているんですが、「道徳なき経済は犯罪である。経済なき道徳は寝言である。」というのがあります。まず、「道徳な

き経済は犯罪である。」これは皆さん分かりますね。不祥事、企業の不祥事もそうです。さらに、二宮尊徳はこういうことを言っていたんです。「経済なき道徳は寝言である。」と。ずっと寝言を言っていて楽しいのはそれはそれでいいんですけども、やはりNPOとして、活動をきちんとしていくためには、経済性は無視できません。ですからこのバランス、最終的にはフォー・ミッションなんだけれども、そのバランスが意外と大事かと。

私どももこういう活動をしていくとき、そのバランスがそうきれいに取れるわけではありません。会社の中でも、NPOの人でも、自分の中でも葛藤が常にあります。その葛藤をし続けることが、結構大事だと思っています。

私がいろいろなNPOの方とお付き合いをしていて思うのは、皆さん、気というのはすごくあると。どんな気かということ、一つは「強気」。気が強くないとなかなかできないんです。でも強気なんだけど、その中に「のん気」もあるんです。お金何とかかなかな、なくてもやるか、というような。それと、すごく「元気」。これは活動をする中できつと、元気がまた出てくるということだろうと思うんですが、皆さんすごく元気で。心が元気だから、体もきつと元気になるだろうと思うんです。もう一つ、「無邪気」。これは、邪気がないという意味ですが、無邪気でないと続けられない。なぜ続けられないか。無邪気でないと皆から支援していただけない、皆から理解していただけないので、結構皆無邪気だと。この無邪気さが人の心を打つし、共感を得るし、人をきつと動かしていくことにつながると思います。

「強気」と「のん気」と、「元気」と「無邪気」を持ち続けて、これは一人ではなかなか難しいので、仲間やこういうネットワークをお持ちになる中で、ぜひ社会のために、あるいは次の世代の子どもたちのために、皆で頑張っていければいいと思っています。それが私たち自身の「元気」にもつながると思っています。

今日またこういう機会をいただいて、ありがとうございます。皆様、ますます頑張ってくださいと思います。今日はありがとうございました。

## ■卒業グループの発表①

### 江都天下祭研究会 神田倶楽部

第1回～第3回助成グループ

実は第1回の最初の発表会も、まさしく1番初めの発表をしたのが江都天下祭研究会でした。私は旅行でいなかったんですけども、第1の1の1で、いー一番で発表させていただいたグループです。第1回、第2回、第3回と、我々が申請したお金をほとんどいただきまして、合計86万円の助成をいただきました。

助成をいただいたのは、『明神さまの氏子とお神輿』という本を作るためです。これは何かといいますと、神田明神の氏子域のすべてを網羅して、写真とともに町会の歴史、文化を1冊の本にまとめたものです。これには写真や文字だけではなくて、昔の写真やさまざまなものを入れ、付録を付けて2,500円で販売しました。実はこれが1カ月半で2,500冊売り切ってしまったのです。そこで儲かってしまったので、一晩で飲んで、どんちゃん騒ぎして、その儲けはおしまいにしたというぐらい、面白い本を作成させていただいたということです。

それで図に乗って、2003年に『四〇〇年目の江戸祭禮』という本を作りました。交流コーナーに展示してありますので、後でご覧になられると面白いと思います。

江戸開府400年記念の話が、神田倶楽部の中でだいぶ前から出ていて、地方に出て行った神田、日本橋の山車がたくさんあるということを知り、本作りが始まりました。何かのきっかけで、そういう山車を集められないか



という話もちあがりしました。江戸開府400年記念のために、どこかお金を出してくれないかと思ったら、千代田区が出してくれたんです。千代田区に1年間で1億円という莫大な金額を出していただいて、2003年11月に江戸開府400年記念事業「江戸天下祭」という非常に素晴らしいお祭りができたんです。

これがきっかけになったのかどうかは分かりませんが、神田倶楽部10周年の新年会のときには、神田祭の氏子域だけではなくて、静岡の掛川や、青梅、熊谷、八王子、鴨川、茨城の石岡、埼玉県川越、本庄、飯能、寄居と、そして栃木県栃木市、それから他のいくつかのまちのお祭りの文化を継承している方々に、120名ほどもお集まりいただきました。今では、毎年だいたい半分ぐらいが神田、日本橋の人、だいたい半分が各地方の人たちにご参集いただいて、大々的な新年会を開催しております。

そうやって、地方に行ってお祭りを見学しながら、その地方の文化との交流、そして自分たちのお祭りがどうすればよくなっていくのか、もしくは、だめな部分はどこなのかという交流をどんどん、私たちとどこかだけではなくて、どこかとどこかも含めて、大きな交流の場をつくっていくということです。

川越の山車のような、こういう文化が神田、日本橋にもすごくたくさんあったのに、今はほとんどなくなってしまいました。ほとんどというかまったくなくなってしまい、お神輿の文化になってしまったものですから、そういうものを我々の目で検証しながら、将来こういうのが



『明神さまの氏子とお神輿』江都天下祭研究会神田倶楽部 編集 2001/04

『四〇〇年目の江戸祭禮 その風景と情熱の人々』江都天下祭研究会神田倶楽部 編集 2004/11



あったらいい、こうなったらいいという勉強会、見学会も含めて、1年間を通して自由に活動をしています。

今年でそういう活動を始めて11年になりますが、一人で勝手に地方に行ったり、さまざまグループで行ったりして、皆さんとの交流を、まだ元気にどんどんしており、さらには地域も広がって、かなりの交流をさせていただいております。

私も千代田まちづくりサポートの4回目から7回目まで審査員をさせていただいておりました。感謝の気持ちを込めて、10周年ということですので、お礼と、おめでとを言いに来ました。本日はありがとうございました。

発表者：<sup>たばた</sup>田畑 <sup>しゅうじ</sup>秀二氏



Q) 本をまとめるのに、どれくらいの期間がかかりましたか。

A) 企画から言えば3年以上はかかっていますが、実際に作り出してからは半年です。

Q) 地方との交流はどういうきっかけで始められましたか。

A) 山車を探すために、初めは、神田にどんな山車があったか検証して、似たような山車があると聞くと実際に見に行っていました。また、インターネットなども利用して調べていくうちに、ちょっとしたきっかけから人的交流が行われて、それがどんどん広がっていきました。

Q) 江戸が今も生きているという感じがします。お神輿の組織がきちんと残っていて、それが江戸のままだというところがものすごく興味深かったです。

Q) 主要メンバーの人数、また男女の構成比や年齢の分布について教えてください。

A) 本を作成した当時は、主要メンバーは17人で、全員男でした。現在は、50代前半の私より上の方が7割、女性は全体の1割くらいです。

Q) 『明神さまの氏子とお神輿』の増刷は考えていますか。

A) 掲載してあるお神輿で、すでに無くなっているのもありますので、資料としては必要かと思いますが、増版は考えていません。

Q) 山車の文化を復活させるという構想はありますか。

A) 非常にお金がかかりますから、町内で作るのは無理だと思います。しかし、さまざまな交流の中で、昔の江戸を再現できるような場面があればいいなと思っています。

今後は、400年続いているお祭りを盛り上げるためには何をすれば良いのかということ、交流をしながら考えていきたいと思っています。

## ■卒業グループの発表②

## NPO法人都市住宅とまちづくり研究会

第1回・第2回助成グループ

としまち研（NPO法人都市とまちづくり研究会略称）の目的と理念は、「高齢者や障害のある人にとっても安全で快適、かつ個性ある都市住宅の供給」と、「暮らしやすい地域コミュニティの構築と再生」で、それを目指して活動しております。もともとは、神田の定住人口が減少していく中で、高齢化などの下に、それが地域コミュニティの弊害にもなっているということで、何とか地域を元気にしたいと考えたことにあります。それにはまず一緒に住んでもらわないと意味がない、神田に住んでもらうための住宅をどういうふうにするかということから、活動しています。ただ住宅を造れば良いというだけではなくて、その住宅に住んでくれた方にどう地域になじんでいただくかということで、キャッチフレーズとして『「ひと」がいなければ、「まち」ではない。「ひと」のつながりがあって、「まち」になる。「ひと」と「まち」がひとつになって、「とし」になる。』とうたっております。

としまち研の設立ですが、まず1997年2月に、「みらい都心居住促進研究会」として、有志15名で任意の団体としてスタートしました。そして、神田地域に住む人を呼び戻す方策を研究しようということで活動を行ってまいりました。1998年10月から2年間まちづくりサポートの助成を受けることができ、そのおかげで、地域での活動がとてもしやすくなりました。具体的なアンケートやヒアリングを行い、今神田に住んでいる人たちが、建て替えをどのように考えているのか、今後も住み続けたい地域として考えられているのかなどということ、実際にお話を伺って知ることができました。そこで聞いたお話、ニーズをもとに、こういう住宅の造り方があるのではないかという手法をまとめて、200名ほどの方にお集まりいただいて、公開勉強会を開催いたしました。

その中に、ある地区の地権者さんが参加して下さっていて、近くで共同建替えを検討しているのだけれども、こういう活動をしているのなら、提案してみないかというお声掛けをいただきました。それがきっかけで、第1号のコラボティブハウス、神田東松下町という事業の取り組みを行うことになりました。

それと並行して、活動を今後持続的に続けていくために、事業を発展させていくために、組織をしっかりとしな



ければいけないということが課題になっていました。そこでどんな組織形態が好ましいかということで、1998年ごろに特定非営利活動促進法（NPO法）ができたことをきっかけに、「NPO法人都市住宅とまちづくり研究会」と名前を決めて、NPO法人組織になりました。

としまち研の活動で、第一に重要なのが、住まいづくりを通じて地域社会の再生を支援するということです。具体的には、共同建替え、コーポラティブ方式という、そこに住みたい人が集まって、皆で建設組合というものをつくり、自分たちの手で住まいづくりを行っていく手法です。私たちは、そういうふうにして出来上がったマンションや既存のマンションなどで、地域社会との交流のきっかけづくりを行ったり、また既存の団地やマンションの維持、管理、修繕、建替えなどを通じて、コミュニティを確立させていくことに取り組んでいます。第二に重要なのが、そこに高齢になっても安心して住み続けられるまちづくりを目指し活動をすることです。

主な事業実績としましては、地権者参加型コーポラティブ住宅のコーディネート（10棟）、土地取得型コーポラティブ



「COMS HOUSE」  
（神田東松下町）、第1号のコーポラティブハウスの建て替え計画

ブ住宅のコーディネート(3棟)、共同建替え+分譲方式によるマンション建設の地権者協議会支援(1棟)、そのほか耐震偽装マンションの再建コーディネートなどがあります。神田地域では、「COMS HOUSE」(神田東松下町)、「クリアール神田」(神田須田町)など、全部で5棟の実績があります。

具体的にどのように行っているかですが、まず神田地域では、アンケートやヒアリングを行ったなかで、「ファミリー世帯が取得できる住宅が少ない」「建替えたいが敷地がせまい」など、さまざまな悩みが浮き彫りになりました。しかし、やはり住み慣れた神田に住み続けたい、商売を続けたいということがあります。そういうニーズに、地権者さんの建替えニーズを組み込んで、建物を建てる時、その建物の余剰部分に、新しくここに住みたいと言ってくる方を集めて、一緒になって住まいづくりを行っていく方法を取っております。

意義としましては、地権者も住み続けたい、商売を続けたいというニーズがある中で、神田地域のように定住人口が減少しているのであれば、住宅供給を支援すること。また、もっと重要なのが、もともと住んでいた人と新しい住民が組織して活動することで、それが地権者を通じて地域社会に広まっていくということを行っています。例えば地域で勉強会を開いたり、近隣の人たちとその新しく住んでいる人たちとの交流の場を設けたり、マンションで防災対策の情報交流会を開いたりしています。それがきっかけとなって、新しい住民の方が地元の役員としてお祭りに参加するということもあるそうです。

それから神田をもっと知っていただくために、「神田を歩こう」というイベントを開催しております。そのときも、実際にまちづくりサポートでお知り合いになったグループの方に講師をお願いしたりして、ご協力をいただいてイベントを盛り上げています。同じような感じで、大手企業やメーカーでは煩雑で取り組めないこと、あるいは人手不足、ノウハウの不足で取り組めないことも、専門のサポーターの企業が支援しながら実現していくことで、地域社会に対していろいろできるのではないかとということで提案をしております。

発表者：関 真弓 氏

Q) 多摩ニュータウンや千里ニュータウンなど、過疎化や高齢化が問題となっているまちがありますが、そういったところの問題を解決するヒントがたくさんあるのではないかと思います。やはり民間の事業としてやる場合とNPOでやる場合との決定的な違いというのは、採算に乗るか乗らないかというところが大きいのではないかと思います。自社では以前似たような方式を取っていましたが、今はフルオーダーの分譲マンションにかなりシフトしているように思います。民間とNPOでうまく役割分担ができれば良いのではないかと思います。

Q) 都心部では、共同建替え、コーポラティブ方式が、あまり成功している例を聞きません。そのために何かかかれていますか。

A) コーポラティブハウスは分譲マンションより手間が掛かるみたいなことを言われがちですが、そういった誤解をせず正しく理解していただくために、本を出版しました。あと何よりも、ただ造るだけではなく、その後も入居者の人たちが地域活動に参加して、それがまちの核になる、という活動を地道に続けて、それがじわじわと広がっていくと一番いいのではないかと考えています。

Q) どのようなことで苦労しましたか。

A) 当初は、「NPOはタダで動いてくれるんじゃないか」、「NPOだからそんな事業はやっちゃいけないんじゃないの」など、いろいろな声がありました。そういう苦労をしたり、対人の事業なので、意思の疎通が図れなかったりしたこともありました。しかし、それを一つ一つ皆で解決してきたことが、今の実績につながり、信頼に繋がって来たと自負しております。

Q) 今後活動を広げていくために、どういったサポートが必要ですか。

A) この活動は一気に広げるのは難しいので、地道にやっていくしかないと思い、活動を続けております。一番のサポートは、私たちの活動を知った皆さんに精一杯応援していただくことで、それはとても嬉しいことです。

## ■卒業グループの発表③

### NPO法人コドモ・ワカモノまちing

第4回～第6回助成グループ

「NPO法人コドモ・ワカモノまちing」は、まちの元気の鍵は子ども、若者になるという信念の下に活動しております。

経緯としまして、私は学生時代に千代田区の大学に通っていました。そこで、「子どもと一緒にデザインしよう会」という団体を立ち上げ、神田地域を中心として活動を始めました。2003年に、千代田区全域に活動エリアを広げ、小学校8校ならびに児童館5つを中心として、いろいろなまちづくり活動をしてきました。また、同年より、3年間の千代田まちづくりサポートの助成を受け、そしてこのたび、今月の頭に「NPO法人コドモ・ワカモノまちing」というNPOを設立しました。

目的としまして、近年、子ども、若者を取り巻く環境がいろいろ変化しています。三感の欠如ということがいわれていますけれども、子どもたちが主体的にまちに参画する環境づくりをするとともに、ここが私どものコンセプトですが、五感を使って、感動、感性、感謝する気持ちを育む「感育」をしていくということを通し、子ども、若者と一緒に豊かなまちを育みたいと思っております。

主な活動内容を発表しますと、平日は小中学校でまち環境学習、デザイン学習をしたり、放課後は子ども基地というプロジェクトをしてきました。また、土日は富士見小学校、麴町小学校を中心としてまち探検をしたり、校庭開放のプレイリーダー、大学生と中高生と一緒にスポーツ大会、スポーツ教室も行ったりしています。それ以外に、月に1回ほど地域イベント、子どもコンテスト、旅学習などという事業を行っております。

具体的に説明していきたいと思えます。まず「まち探検環境ぶらり」です。自分を取り巻く環境をわくわくドキドキしながら感じられるようなことを提案しています。例えば、未来の学校づくりで、学校をどうしていけば良いだろうと考えることから、また、まち学習ということで、単に学ぶだけではなくて、子どもたちが自分で提案したり、自分から参加したりできるような活動を行っています。

2つ目は、他世代、地域との交流です。いろいろな世代間交流のイベントを企画したり、千代田区の子どもたちが他の地域に行く交流イベントを企画したり、また東京に来る子どもたちをこちら側でおもてなしをするイベン



トを実施しています。

3つ目は、「子ども祭り」です。児童館の祭りや神田の子ども縁日を中心として、子どもたちと一緒にお祭りをつくる、子どもや若者たちが一緒になってお祭りをつくって楽しむ、ということ共感しております。また、アート創作活動ということで、セントラルリーグ東京、神田リレー祭りなどのアートイベントに参加をし、子どもたちの作品をどんどんまちに出していこうという活動も行っております。さらには、神田のそば屋のメニューコンテストを開催したり、雪だるまフェアのキャラクターコンテストをしたりと、商店街と連携して実施しました。

それから、絵本・キット本ということで、小学校低学年向けの「おばけのピースくん」という教材で絵本を作ったり、子どもたちがまちを楽しく五感で感じられる「まちデザインキット本」を作成しました。

サポート後は、新プロジェクトとして子ども基地ということをやってきました。神田にある1軒の空き家を借りて、子どもたちのたまり場、遊び場を作りました。放課後になると子どもたちがわっと遊びに来て、2階には学生たちが居住し、路地遊び、まち遊びを展開していきました。運営スタッフは、千代田区の大学と共同し、週ごとに交代制で運営していました。また、この運営費用は500円の出発料やワンコイン創造教室の開催、地域や企業からの物品提供によって賄われていました。しかし2年後、マンションの改築で、この子ども基地は取り壊されてしまいました。当時いろいろ空き家を探してみたけれど、な

かなかみつかりませんでした。非常に悩みましたが、あきらめるのではなく逆転の発想をして、1カ所にとどまるのではなく、まち全体を遊び場にできるような仕掛けはできないかということを考え、「移動式子ども基地」というものを開発しました。

「移動式子ども基地」は、小型のトラックです。このトラックにはいろいろなものが搭載されていて、これを子どもたちに開放し、まち全体を遊び場にして、まち遊びに生かすという試みです。夕方や、土曜日、日曜日になると、このトラックが路地や広場に出現します。昔の紙芝居のようなもので、現代版の紙芝居としてまちを回遊することで、さまざまな人、こと、ものと交流をするという、そういうトラックです。実はこれは財団法人トヨタ財団からいただいた助成金で造っています。

10月11日に、「移動式子ども基地」のオープニングイベントを開催し、子どもたちと一緒にトラックにペイントをしました。デザインは、千代田区の8校の小学校で開催したデザインコンテストの優秀作品です。現在、地元の学生団体と共同して、「移動式子ども基地」を利用した地域イベントをしたり、今後、商店街と連携して、廃油エネルギーを使うという仕組みも考えております。このトラックに乗って日本各地を回り、地域と地域をつなぎ、最終的には、キャラバンとして世界を回るという夢も持っております。

今後の事業としては、引き続き「移動式子ども基地」「まち学習・環境デザイン学習」「里山『旅育』プロジェクト」などの事業を実施していきます。

最後に経過報告ということで、子ども・若者の居場所づくり、地域のコミュニティづくり、まちの担い手育成、心豊かなヒトを育てるという4つの成果が今までできました。今後もこの4つの軸を基に、活動を展開していきたいと思っております。まちに子どもがいっぱいいる、そんなまちをみんな育てていきましょう。

発表者：星野 <sup>ほしの</sup> <sup>さとの</sup> 諭 氏



神田雪だるまフェア  
-「移動式子ども基地」  
で遊ぶ子どもたち  
2009/01

Q) ボランティアはどのくらいいますか。また、何人くらいの子もたちがイベントに参加しますか。

A) 様々な学生団体が参加していますが、現在は50名の学生プレリーダーがイベントの運営をしています。参加人数はイベントによって違いますが、500～600名ぐらいの子どもたちが参加するイベントもありますし、子ども基地自体は10名くらいを想定して展開をしています。基本的には、学生も子どもたちも登録をしてからの参加になります。

Q) 子どもと接する上で、どのような苦勞がありましたか。

A) 子どもというよりは、親ですね。子どもはよくケガをします。私たちのコンセプトとしては、やはり少々のケガは仕方ないと思っていて、むしろ小さいケガはさせたほうが、子どもたちは体験として何が危ないのかを覚えていくという見識の元でやっていますが、なかなかその旨を理解していただけない部分もあります。地道なコミュニケーションで理解していただく努力をしていくしかないと思っています。

Q) 8年間活動をされているということですが、以前は参加者として参加していた子どもたちが、今度はボランティアとして参加されているといったようなことはありますか。

A) 実際にあります。当時小学校高学年だった子どもたちが、中学、高校、大学と大きくなり、リーダーになっていたり、当時中学生や高校生でボランティアをしていた人たちが、またリーダーとなって参加していたりという循環が今、少しずつ出来てきています。

Q) 場所がないから移動式にしたわけですが、やはり地域に場所があったほうが良いと思いますが。

A) その部分はまだあきらめていないです。やはり、溜まり場という皆の場所も必要ですし、そこだけで完結してしまうのではなくて、今回造った移動式も利用して、両方を連携させながら、イベントをどんどん展開していきたいと思っています。

Q) そのためには何が必要ですか。

A) 資金です。ある程度学生スタッフが育ち、地域側の理解もできてきましたし、一緒にやりたいと言ってくれる方も増えてきました。ただ、そこでやはり問題になるのは資金です。地域に拠点を構えとなると、初期費用などかなりの費用が必要になりますので。

## ■卒業グループの発表④

## 千代田区こども110番連絡会

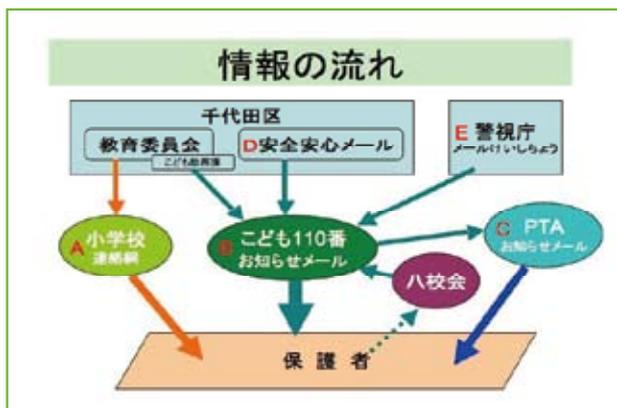
第5回～第7回助成グループ

冒頭にまずは御礼を申し上げたいのですが、ちょうど私どもがこの「千代田区こども110番連絡会」を企画したのが8年前でした。平成15年から17年までまちづくりサポートの助成をいただき、そのおかげで、いわゆるネットワークづくりというところに大変大きな成果を得ることができました。現在は、区内の小学校の全てのPTAの組織の中に「こども110番」というプログラムが生まれ、活動を続けていただいております。

発端は、平成12年4月、麴町小学校が建て替えのために旧永田町小学校に移転した直後のこと、永田町かいわいで発砲事件が起こりました。それでまず麴町小学校に通う生徒さんの親御さんを組織し、何をしたら良いかという話し合いから始まりました。

大事なコンセプトですが、まずは「子どもの自覚」、それから「未然の危険防止対策」、これは親の義務の励行です。それから「犯罪が起きにくいまちづくり」、まなざしのあるまちづくりということになります。そして「学校・通学途上対応策」、地域のまなざしを強化して、学校通学途中の対応策を考えることはPTAが行い、行政には制度の支援をお願いしようということで、この5つのコンセプトに向かって活動を開始しました。

平成20年現在、このような(下図参照)安全情報網が出来上がっております。保護者に千代田区、それから警視庁、ならびにPTA、こども110番、それから各小学校からというふうに全てから情報が集まるようになっております。



危険の防止対策として、取りあえず自ら子どもを守ろうということになり、保護者のボランティア200名、ならびにPTAから自主運営費20万円の予算を出しました。通学路の総延長3.2キロに、10メートル毎に1軒の「こども110番の家」を設け、子どもが何か危害にあったときにすぐ飛び込めるようにいたしました。それから、「こども110番の家」があるということを周知するポスターを作成し、町会の掲示板に張らせていただきました。ステッカーは、「こども110番の家」に、子どもたちが見える目線に張り、さらには、子どもが駆け込んできたときにどうするのかというマニュアルを作成して配りました。

このようにして麴町でボランティア活動が開始されたわけですが、平成13年には、この活動を区内の8つの小学校に呼び掛けました。この呼び掛けに呼応してくださったのが、千代田区の当時の石川区長、大山助役、若林教育長等で、行政として何か支援できることがあればという立場で参加していただきました。また、この活動に賛同してくださったボランティアの方々が延べ600人、「こども110番の家」が2,380軒、協力体制を組織してくれました。それから、何かあったときにすぐ子どもが対応できるようにということで、各学校の先生方が子どもたちと「こども110番の家」を回り、「もし何かあったら、ここのおじさん、おばさんに言ってね」と教えました。これで、「こども110番」のインフラ整備が完了しました。

インフラの整備が終わったところで、もう一度検証を始めました。その際、行政がいち早く窓口を設定してくださ

り、支援体制を組んで「こども110番の家」の見舞い金制度、補償制度を導入いたしました。それから親の義務の励行として、PTA活動を強化しました。

また、家庭での徳育と未然の危険防止対策として本プロジェクトの充実のため「こどもを守る電腦まちづくりプロジェクト」を発足させ、IT技術を活用したネットワーク作りに着手することにしました。さらには、毎年最低1回は、各「こども110番の家」にポスターの張り替えや学校の情報、マニュアルの変更等をご案内する際に、新聞を作ってお持ちし、コミュニケーションを図っています。

2年目以降の活動も、同じように検証を行いました。これは家庭での徳育という点で、セミナーやシンポジウムを頻繁に開催しました。3年目が終了後、情報伝達の更新リストの作成をしたり、こども110番の連絡会としてのIT委員会を、こども110番運動の中にもう一度戻して、それから行政機関との定期連絡会の開設をいたしました。千代田区安全安心まちづくりネットワークとのハーモナイゼーションもいたしました。

現在、保護者が、中学校も入れますと約4,500名になります。それから110番の家、現在、関係機関も含めると約2,500名。全部で7,000名程度が活動をしています。今後の課題としては、安全・安心メールのネットワークが充実してまいりましたが、保護者へのアクセスが現在多方向からされているので、この辺をもう少し整備したいと思っています。それから行政の「まちかど見守り隊」というのがスタートしておりますが、これらも最終的には、保護者たちの活動に受け入れなければならないという状況もありますので、多少負荷が掛かっております。

こういうことから考えると、当初立てた枠組みを、もう一度次の枠組みに作り変える必要があるのではないかとというのが現状の課題です。これは今まで申し上げたことですが、ここで「自発的な個人=まちの活力」という視点から、まちの活力が果たして企業の参画を求めるのであろうかという、この辺が今後の議論のところだろうと思います。ご清聴いただきましてありがとうございました。

発表者：鈴木 齊 氏

Q) 配信する情報の切り分けはどのようにされていますか。また、どのように配信されていますか。

A) 行政からはいろいろな情報がきますが、学校はやはり自分の学校の情報しか配信していません。そこで110番連絡会から、保護者の方にメールで、情報を流しております。また、現在は働かれている女性も多く、携帯電話のメールだけでは情報が伝達しきれないため、パソコン・携帯電話・FAXそれぞれに対応できるようにシステム化して運営しております。

Q) この活動は持続性が非常に課題になると思いますが、活動を行っていく上でどのような問題がありましたか。

A) PTAは毎年メンバーが変わりますが、それまで関わってきたお母様が、自分たちのやりやすい活動方法を構築し、マニュアル化されてきています。そして次にメンバーになった方にそれを引き継ぐという形なので、運営は非常にスムーズに回っています。

Q) 活動を維持するために必要なサポートはなんですか。

A) 例えば、これから高齢化社会を迎えて、独り身のご老人の事故、悪意はないのだけれどもお金を使わずに品物を持っていってしまう、そういうのが非常に増えていくと思われま。地方によってはタクシー会社が協力したり、コンビニの方々が協力してやっている事実もあるとは思いますが、千代田区の場合はもう少し人口の密度も高いし、これは保護者だけの力ではできないのではないかと。そうすると、そこにそれなりのサポートが必要であろうなとは思っています。



## ■卒業グループの発表⑤

## CAPPS (キャップス)

第7回～第9回助成グループ

CAPPSというのは、千代田区アダプト公園プロモーションシステムといいまして、千代田区がやっているアダプトシステムで、地域と行政が一緒になって公園を美化していこうというシステムです。これまでにこのシステムが適用され美化されている公園が少ないということで、少しでも美化活動を増やしていこうとPRする目的で設立されました。

私どもと千代田区との間に、2005年10月25日、特定地域に限定されない、つまり千代田区は地域の住民の方たちが少ないために放置されている公園が非常に多いので、そこをフリーハンドで美化できるという画期的な覚書を結びまして、現在活動を続けております。現在の活動としては、常盤橋の公園の再生プロジェクト、清水谷の清掃、それからさくらサポーター通信のバックアップ等があります。

まず始めたのが、常盤橋公園の再生のプロジェクトです。常盤橋公園には江戸時代の常盤橋御門、それから明治10年に造られた石橋の常盤橋、それから渋沢栄一の銅像といった歴史遺産がありますが、非常に悲惨な状態でした。なぜ荒廃していたかと言えれば、オフィス街で住民が少ない。ですから行政の関心も少ないということで、私どもで再生プロジェクトを開始いたしました。まずは清掃から始めようということで、近隣企業のNPO大丸有エリアマネジメント、中央区の日本橋地域ルネッサンスに協力を仰ぎまして、協賛を得て、公開清掃を合計で8回ほど行っております。

また、常盤橋公園の花植えですが、これは本年度まで4回行っております。実は一昨日、大和証券、ゆうちょ銀行、それから三菱地所、三井不動産の方が合計で述べ40名ほど参加され、佐藤工業からいただいているチューリップの花植えを行いました。



常盤橋公園の花植えの様子  
2007/04



その他の活動は、学生に「常盤橋公園再生プロジェクト」のレクチャーをしたり、最近『ぶらり途中下車の旅』にも出演させていただきました。

また、常盤橋フォーラムという団体を設立しました。日本橋地区と千代田区の手町地区の名のある団体と行政が、常盤橋公園の活性化と回遊性を高めるイベントをつくるという目的で結成され、近隣の企業の方にも参加していただきました。常盤橋フォーラムの参加団体としては、座長に日本大学の伊東先生、それから大手町地区ではNPO法人大丸有エリアマネジメント協会、それから日本橋地区ではルネッサンス100年委員会と名橋「日本橋」保存会、行政では千代田区立四番町歴史民族資料館です。

常盤橋フォーラムとしては、春に桜まつりということで、EM菌だんごの投下と名建築巡りといったイベントをやりました。夏には江戸東京の川再発見の船のイベント、秋には日本橋の清掃活動、それから11月には江戸城と歴史建造物を巡る大手町隊といった活動をしております。また、佐藤工業さんからいただいたチューリップの球根を、番町小学校、麴町小学校、白百合学園等の学校に寄付しております。そのほかには、伊東先生の講演活動、ブリッジウォーク、千代田区の方のさくら再生事業であるさくらサポーター通信というのを、通算8号発刊しております。

今後の活動ですけれども、麴町は地域住民が少なく、また神田地区は人が少ない。これは環境問題への関心が

少ないということにつながります。地域や環境の美化には企業や団体の協力が不可欠であるということで、比較的参加しやすいボランティア活動の公園である再生活動に参加していただけないかと、ボランティアを募っております。

常盤橋フォーラムとして、今年の12月24日、25日に、大分の竹田市から寄付していただいた竹を使ったイルミネーションイベントというものも、企画しております。また広報等々で申し上げますのでご覧ください。

そして、山本さんと私どもと一緒に清水谷公園のアダプト化というものもやっております。最後にアダプト活動を、山本さん、一言。

発表者：岡田 邦男 氏 おかだ くにお

清水谷公園で「緑キャノピーズ」という活動の代表をしております、紀尾井町原産地、生まれも育ちも全部、紀尾井町の山本坦です。清水谷公園は、大久保利通が、あの近辺で明治11年5月10日に暗殺されて、それを記念した碑が建てられたことから公園が造られました。同じ紀尾井町の町会のメンバーであるプリンスホテルとニューオータニ、それから番町地区の方々、麴町地区の平川町の方々、それから平河・隼・紀尾井町環境整備協議会から協力をいただいて、活動しております。

千代田区から緑や土がなくなっていくないように、緑をなるべくつなげて、武蔵野台地に残る鳥の生息地としての紀尾井町、お堀を残していきたいと思って活動しております。良いのは、住人だけではなくて、議員、区議、区会議員、その家族の方に入れ代わり立ち代わりお手伝いをさせていただいております。

先ほどフィランソロピーの高橋さんからお話がありましたけど、行政が「たこつぼ」からなかなか這い出てこなかったのを、この強気、元気、無邪気、強引でもって引きずり出して、それでいろいろ活動をしていただくようになりました。今、アダプトの公園が18ありますので、将来的にこれをつなげて、活動を広げていきたいと思っております。

それからもう一つ、千代田まちづくりサポート事業10周年ということで、そのうち5年間審査員をさせていただきました。どうも皆様、おやかましゅうございました。

ありがとう。

発表者：山本 坦 氏 やまもと ひろ

Q) 当社はさくらサポーターの法人会員として参加しています。また、NPO法人大丸有エリアマネジメント協会に当社の社員も出向しております、いろいろとお世話になっております。昨年の3月に常盤橋公園の清掃活動にも参加させていただいております。まちがきれいになるということは、そこに来る方も気持ちよく来ていただけるということで、大変良い活動になりますし、これは長く継続していく価値があるものじゃないかと思っています。

Q) 中央区も千代田区も、それぞれ企業が企業ボランティアネットワークのような連絡会をやっています。そういうときに一度、活動の紹介に来られたりすると良いと思います。千代田区の企業ボランティア連絡会は、千代田区に拠点を置いている企業が17～18社でやっているもので、こういう活動なら社員がとても参加しやすいし、ボランティアを募ることもできると思います。

Q) 私の会社は港区に本社があります。近隣の会社が何年前から、公園の整備や美化、花植えを始めているのですが、私の認識不足かもしれませんが、点で、面として広がりがありません。それこそたくさんの方の史跡が港区にもありますが、それを生かしていこうという動きも、私にはちょっと見えないところがありまして。ぜひCAPPSさんにお話を伺う機会を作って、近隣の企業を激励したいなと思っています。

Q) 本当にCAPPSさんは企業や行政とうまくリレーションを取っていくのが上手で、とてもバランスの取れた団体じゃないかなと思いますし、そこから新しいものも生まれているというのが、ものすごく評価できると思います。ぜひとも今の活動をどんどん発展させていただきたいと思っています。



## ■表彰式

卒業グループの発表終了後、来場者の投票により、金・銀・銅・優良の各賞が決定されました。  
(カッコ内は副賞の金額です)

### 金 賞 (8万円)

NPO法人コドモ・ワカモノまちing

### 銀 賞 (6万円)

CAPPS (キャップス)

### 銅 賞 (4万円)

NPO法人都市住宅とまちづくり研究会

### 優良賞 (2万円)

千代田区こども110番連絡会

江都天下祭研究会 神田倶楽部



### 金 賞

ほしの さとる  
**星野 諭 氏**

NPO法人コドモ・  
ワカモノまちing

「本当に、私一人では何もできません。こういうまちづくりというところ

で、皆様のご協力の下で、これまで8年間やってこられました。今後もこの千代田から、全国ならびに全世界に、本当の生き方とは何だというメッセージを発信していきたいと思っておりますので、今後ともご協力のほど、よろしくお願いいたします。」

## ■コーディネーター・コメンテーター総評



<コーディネーター>

すずきのぶはる  
**鈴木 伸治 氏**

横浜市立大学国際総合  
科学部准教授

皆様、お疲れさまでした。特にプレゼンテーションをしていただきました卒業グループの皆様、我々もあらためて勉強になりました。ありがとうございます。

5団体の活動を見て、やはりこれは行政にも絶対できない活動であるし、企業でも絶対できない活動であるということ、あらためて確認をしました。特にこのまちづくりサポートから出てきた活動であるということの意義は、企業にも民間にもできない活動ではあるけれども、そこをうまくつなぐこと、あるいはNPO法人、まちづくりのグループ同士の関係をうまく作っていくこのサポートのシステムが、こういう成果を生み出してきたのではないかなと思います。

私自身、審査委員をやる以前から、ちょこちょこ顔を出させていただいておりましたので、まちづくりサポートの初期の段階の状況も知ってはいますが、やはり10年間を振り返ってみて、非常に活動の層の厚みみたいなものを感じました。これは、やはり今後もこういったものを続けていく必要性はあるだろうとあらためて分かりましたし、逆にこの10年間、このサポートを運営してきた陰に、サポーターズクラブの地道な活動であったり、あるいは初

期に立ち上げた職員の方たちのご苦労というものがあつたりして、ここまで来たんだということ、あらためて感じました。

また今後に向けてですけれども、ここでもう一度考えなければいけないのは、まちづくりサポートというのは、基本的にはやはり活動の初動期の部分、立ち上がりの部分、あるいは新しい活動を始めようと思ったときにサポートする事業ということですので、やはり3年間という期限が切られています。しかし、まちづくりサポートを卒業した人たちもこれだけ豊かな活動をしているわけで、ここをどうサポートするのか。もしかしたらもうサポートはいらぬよというところはあるかもしれませんが、もしサポートが欲しいと思ったときに、そこをどう支えていくのか。もしかしたらアドバンストコースのサポートのシステムなんかも、今後検討していく必要があるのかなとも思いましたし、もしかしたらそれは、企業とこういうグループの活動をマッチングしていく形で実現するのかなとも思いました。

いずれにしろ、行政や民間企業にできない活動が、千代田という本当に東京のど真ん中で生きているということは、ものすごく重要なことだと思いますし、これこそがこれからの社会資本の一部ではないかと思いました。

私自身も、審査委員長という形ですが、むしろここでは勉強させていただくことが非常に多いように思います。来年の3月には、もう1回最終報告会がありますけれども、そのときに今回の5グループをお手本に、今年の各助成グループの活動が大いに盛り上がることを期待して、私のあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございます。



&lt;コメンテーター&gt;

 たかはし すずむ  
**高橋 進氏**

 三菱地所株式会社  
 CSR推進部参事

今日は、お招きいただきまして、本当にありがとうございます。なかなかこういう機会に接することはございませんので、時間があっという間に過ぎてしまったというのが正直な印象です。地域の問題をそれぞれの団体の方が掘り下げて、真剣に取り組まれているということ、それをうまく、笑いも誘いながら表現されていっていることは、かえって真剣さがよく表現されているんじゃないかなと伺った次第です。民間企業としてできること、できないこと、いろいろあるかと思えますけれども、今日はそういう中で、いろいろなヒントを頂戴したなという気持ちです。できることを持ち帰って、また社内ですることはやっていきたいなという印象を持ちました。本当に貴重な機会をいただきまして、どうもありがとうございました。



&lt;コメンテーター&gt;

 たきがわ きよし  
**滝川 潔氏**

 富士ゼロックス株式会社  
 CSR部社会貢献推進グループ  
 マネージャー

本日はどうもありがとうございました。5つの団体とも素晴らしい発表で、本当に今日は勉強しに来たという感じで、非常に大きな宝物を持って帰るような気持ちです。ぜひずっと継続していただきたいという活動ばかりですが、その中でも、コドモ・ワカモノまちingの発表は素晴らしいなと思いました。元気だけではなくてアイデアも、それから今後、これからの将来にわたって夢をいろいろ大きく描けるような活動だと思えます。ぜひいろいろな形で応援させていただければと思っております。このまちづくりサポート10周年記念事業に当たって頑張っているらっしゃる活動をお聞きしまして、あらためて企業として何ができるかということ、持ち帰ってじっくり考えてみたいと思えます。今後ともよろしくお願ひします。



&lt;コメンテーター&gt;

 たなか きょういち  
**田中 恭一氏**

 財団法人トヨタ財団  
 地域社会プログラム  
 シニアプログラムオフィサー

とても素晴らしいプレゼンテーションをありがとうございました。3点だけ、もしあえて言えということであれば、共通していることですが、本当に元気な方たちが活動されているのだなということが、非常に伝わってきました。それが1点目です。2点目は、この「まちづくりサポート」が本当の意味での場になっていて、非常に交流が盛んに行われているという気がいたしました。3点目は、これはおそらく一般解にはならないような活動ではないかと思いました。非常に特殊な事例ですけれども、千代田区の特長である、元気なことと、こよなく交流が活発だということにおそらく起因されているのかと思うのですが、非常にそんな気がして、私は5つとも素晴らしい活動だと思って傾聴させていただきました。



&lt;コメンテーター&gt;

 ぬのかわ まりこ  
**布川 真理子氏**

 株式会社大和証券グループ本社  
 CSR室課長代理

今日はこういう貴重な会にお招きいただきましてありがとうございました。そしてNPOコドモ・ワカモノまちingさん、受賞おめでとうございます。拝見していて、どの団体もやはり千代田区が大好きなんだなというのをすごく感じました。それぞれに抱える個人情報の問題であったり、親御さんの理解を得ることであったり、行政への焦燥があったり、進めていく上でいろいろな困難を抱えておられると思います。ただ、それを途中であきらめずに長く継続してこられたというのは、やはり千代田区が大好きなんだという皆様の愛区精神がすごく伝わってきました。私も、千代田区に拠点を置いて活動している企業として、ということが実際できるのか、私もこれを会社に持ち帰って、検討させていただきたいと思えます。

## ■閉会のことば



副理事長

かわさき ゆうこう  
**川崎 侑孝**

いつも皆さんにはご協力いただいておりますことを、厚く御礼を申し上げます。今日は10周年記念ということで、日本フィランソロピー協会の高橋理事長に貴重な講演をしていただきました。経験を踏まえられた、10カ条、それから4つの気というものを伺えて、大変貴重な意見、考え方だなと思いました。

また、今日発表されました先輩の5グループ、やはりさすがに経験豊富で内容も充実していると。千代田区の活性化のために、これからも地域のオピニオンリーダーとして、ぜひ頑張ってくださいと思います。

今日、会長からは、いろいろご支持のお話をいただきましたが、これからも財団としては、このまちづくりサポートに力を入れていくつもりです。ですから、今日会場にいる皆様、地域に戻りまして、こういう事業をやっているということをPRしていただきたいと思います。今日のコメントーターの皆様、そして鈴木先生、本当にありがとうございました。

長時間にわたりまして、ありがとうございました。これもちまして、10周年記念事業を終わらせていただきます。なお、このあとに懇親会がありますので、どうぞそちらの方にも積極的にご参加いただければ幸いです。ありがとうございました。



## 千代田まちづくりサポート10周年記念事業

## 懇親会

## ■開会あいさつ



理事長

おさだ たかお  
長田 貴雄

今日は朝早くから、皆様本当にありがとうございました。高橋先生をはじめ各先生、先輩グループの皆様ありがとうございました。皆様、話を聞かれていかがでしたでしょうか。多分、今後の皆様の活動の参考になったのではないかと思います。まちづくりというのはそこに住ん

でいる人、働いている人、学んでいる人が、自らこうしたいという想いを持って行うのが原点だと思います。また、継続することが極めて重要だと思っております。今後もぜひ皆様方が活動を継続されまして、千代田区を良いまちに住みよいまちにしていただければありがたく思います。

この10周年記念事業が、皆様の今後の活動が発展するきっかけになればと考えております。それではこれから懇親会を開きますので、各先生方や先輩グループの方と直接意見を交換されて、皆様の今後の活動に生かしていただければと思っております。どうもありがとうございました。

## ■来賓あいさつ



千代田区長

いしかわ まさみ  
石川 雅己 様

皆様、こんばんは。10周年おめでとうございます。本日はご出席の皆様方をはじめ、多くの皆様方のお力添えがあって、10年を迎えられるということに、まずは感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

ご承知のとおり、千代田区の魅力ですとか、元気があるまちですとか、活力あるまちということで、市民提案型のこうした取り組みが10年になったわけでございます。いろんな自治体でもこういった取り組みをしておりますが、なんといいてもこのまちみらい千代田が、会員の皆様方の貴重な浄財で支援活動をさせていただいているというのは、大変珍しい取り組みだろうと思っております。

そういう意味で10年間の皆様のお力添えにより、今日を迎えられたということで、本当にうれしく思っております。10年経ってみますと、皆様方のご支援によって、か

なり多くのグループが活動を発展させ、とても素晴らしい事業になってきているということもあります。

しかし一方では、人材や資金面で非常に難しいといったようなお話を聞いております。この10周年というのをスタート台にして、提案型というのをもう少し、皆様が続けられるようにするのは、課題であろうと思っております。

今日の社会の中で、企業の皆様は、社会的貢献ということをかなり意識されています。そういう意味では皆様方の提案型と企業とをどういう形でコラボレーションするか、ジョイントするかといったことが、大きな課題になってきているだろうと思っております。この財団がそうしたことをどういう風に、皆様方の想いをこれから更に発展させていくかは、私は大きな宿題になっているだろうと思っております。

私はこういう事業こそ本当の意味での財団なり、皆様の手作りによる事業であって、すごく大切であり、意味があると思っております。ぜひ皆様方におかれまして、今後大いに、この事業がもっと発展するよう、積極的に、PRをしていただきたいと思っております。

私はこういった提案型の取り組みが大好きですから、区政の粋でもしっかり支えていくということ、10年の節目に当たりまして、きちっと約束いたしまして、今日のお祝いのご挨拶とさせていただきます。本日はどうもおめでとうございます。ありがとうございました。

## ■ 乾杯



千代田まちづくりサポート  
審査委員会会長

すずきのぶはる  
**鈴木 伸治 様**

改めて10年を振り返って考えてみると、この千代田まちづくりサポートというのは、非常に時代の先端をいっているまちづくりの事業なのではないか、という思いを強くしました。

私は横浜で創造都市のアドバイザーを勤めておりますが、その中で、先日大阪府知事のアドバイザーを勤めていらっしゃる橋爪紳也(はしづめしんや)さんと、じつは昨日飲んでたんですけれども、その中で、いくつかの意見で一致したんですが、一つは住民のことだけを考えてやるまちづくりの時代というのはある意味では終わったと。住んでいる人、働いている人、それからまたそのまちを訪れる人、それから、まちで学ぶ人、いろんな人がいて、いろんなタイムスパンでまちの中で活動しているんですけども、そういった人たちのためにまちを作る時代になったんだと。そういう風に考えて見ますと、まちづくりサポートというのは町会をベースにしたような活動も出てきますし、学生の活動も出てくる。それから、そこで働く人を巻き込んだ提案も出てくるということで、非常に多様な人材

がこのまちづくりサポートに関わってくるという面で、非常に先端的であるという風に思います。

それからもう一つ、このまちづくりサポートの良い点は、参加した人たちがネットワークを作ってお互いに交流しているところです。それぞれが非常にクリエイティブな発想、クリエイティブな活動に基づいて活動しているという、そういう人材を蓄積していくという、ネットワークを作っていくという、そういう仕組みが非常に先端的じゃないかなと思います。まちというのはある程度作ってしまうと、これからはそのまちをどう使っていくか、どうマネジメントしていくかという時代になるわけで、そういう意味で時代の非常に先端を進んでいる事業ではないかと改めて思います。

これまで10年続けてきたわけですけど、これからまた10年20年と続けていく必要があるわけで、やはりそれを支えていく行政、財団、また浄財を提供している企業の方、個人の方に、改めて、事業の重要性を認識していただく必要があるというふうに思います。

ただいま石川区長から、非常に熱いエールがあったということも、この事業の今後の励みになると思います。

お手元にビールも回ったと思いますので、今後のまちづくりサポートの発展とそれに関わる人々、活動団体のますますの発展を祈念して乾杯したいと思います。ご唱和下さい。乾杯!

## ■ 来賓あいさつ



千代田まちづくりサポート  
元審査委員

やまもとひろ  
**山本 坦 様**

10年目を迎えて、本当におめでとうございます。活動されている方、過去の審査員の皆様、それからもちろんまちみらい千代田の長田理事長はじめ皆様、どうもありがとうございました。

ここまで千代田区のまちを大切に思い愛する心が通じて、こういうまちづくりが長い期間継続したというのは、非常にうれしく存じます。例えばここから派生して星野さ

んのように世界を目指す方とか、ごく近くではボーダーを超えて中国まで遠征しているCAPPSとかいろいろありますので、千代田区の中だけで縮こまってないで、ここから派生していくことが、これから先の課題でありますし、重要なことだと思います。

本日は、誠にありがとうございました。



平成19年度  
最終成果発表会

## ■ 締め



千代田まちづくりサポート

審査委員

たくま せいとく

田熊 清徳 様

本来なら田畑先輩、立山先輩がご挨拶するところを、先輩方を差し置きまして、一応審査員ということで、一本締めさせていただきます。

私は審査員しかしておりません。私はサポートに応募したこともメンバーに入ったこともありません。勝手なことを言って、審査員を3年間やらせていただいておりますが、今日の10周年で皆様の活動、先輩方の成果発表プレゼンをお聞きしまして、本当に10年の重みというのをひしひしと感じております。本当に感動いたしました。

このまちサポというのは、千代田区で一番意義のある事業ではないかと本当に思っております。しかし、知られていないんですね。先程堀井さんもおっしゃっていましたが、町会にあまり認知されていないというのが一つあります。私も町会で育って町会の役員等もやっておりますから、町会にいかにPRして、町会という千代田の大きな山をどう動かすか、どう巻き込むかというのがこれからの課題だと思います。私も地元に戻りまして、田畑先輩たちと共にPRに努めていきたいと思っております。今日は私自身も大変勉強になりました。本当におめでとうございます。

それでは神田一本締めで、ご唱和いただきたいと思います。

千代田まちづくりサポート10周年を祝い、また皆様、グループの方、ここにおいての方、ますますの発展とご健勝を記念いたしまして、お手頭を拝借。

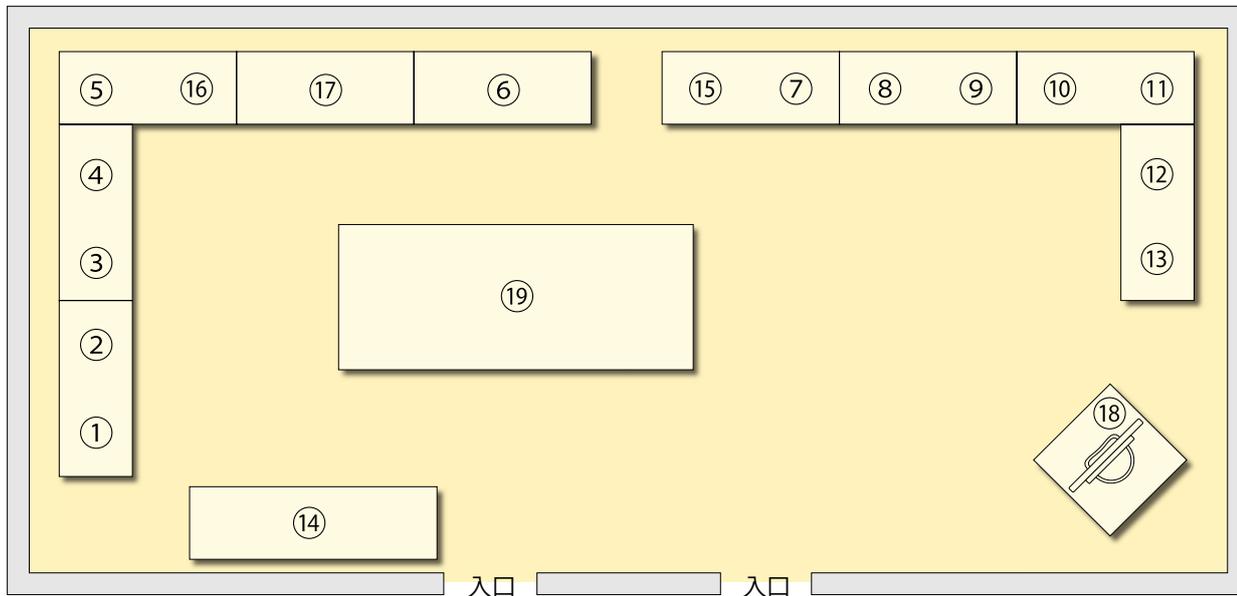
よ～（一本締め）



千代田まちづくりサポート10周年記念事業

# 交流コーナー

## 会場図



### <これまでの活動事例>

千代田まちづくりサポートを卒業したグループの過去の成果物や活動を紹介

- ①江戸神田蕎麦の会
- ②江都天下祭研究会 神田倶楽部
- ③神田SU(ス)
- ④番町まちづくり文学会館
- ⑤法政大学ACIプロジェクト
- ⑥若き日の歌・校歌の旅人

### <市民まちづくり支援・都市ネットワーク会議>

同じような助成事業をはじめとする、市民まちづくり支援に関する情報交換、発信、及び調査研究等を行うために設立。各会員の活動を紹介しました。

- ⑦草加市みんなでまちづくり課
- ⑧横浜市・横浜市市民活動支援センター運営委員会
- ⑨財団法人世田谷トラストまちづくり
- ⑩財団法人としま未来文化財団
- ⑪財団法人名古屋都市センター
- ⑫財団法人練馬まちづくりセンター
- ⑬高知市・高知市市民活動サポートセンター



<その他>

- ⑭千代田まちづくりサポートの概要
- ⑮千代田まちづくりサポーターズクラブ（CSC）の紹介
- ⑯千代田まちづくりサポートアンケート調査結果
- ⑰千代田まちづくりサポート通信 合冊記念誌
- ⑱助成活動DVDの放映
- ⑲その他チラシ・パンフレット



■千代田まちづくりサポート通信 合冊記念誌の紹介

「千代田まちづくりサポート 10年のあゆみ」



10周年を記念して、これまでに発行した「千代田まちづくりサポート通信」全18号をまとめた合冊本を作成しました。2003年に出された提言書や、アンケート調査結果なども掲載してあります。

<内容>

- 助成団体一覧
- 歴代審査員一覧
- 千代田まちづくりサポート通信No.1～No.18
- 千代田まちづくりサポート推進検討会 提言書
- 千代田まちづくりサポートアンケート調査結果

■助成活動DVDの紹介

平成20年度、助成を受けている団体10グループの活動を紹介するDVDを作成し、放映しました。また、10周年記念事業当日の様子や活動成果発表会の様子も収めた、千代田まちづくりサポートPR用のDVDも作成します。(2009年4月完成予定)



【DVD①】

「平成20年度助成グループの活動紹介」



【DVD②】

「千代田まちづくりサポートPR」



寄稿 千代田まちづくりサポート10周年記念事業

## 「記録者としてのこの10年から」

かしはら れいこ  
編集室風葉舎 柏原 怜子氏



### ■まちサポの古ナマズに

「サポート通信」のまとめを書いてほしいという依頼を受けたとき、市民活動など意識にもなかった私は、ほんのお手伝いのつもりでした。ところが気がついてみたら、当初の編集スタッフも、審査委員の先生方や「まちみらい千代田」の事務局も、3年が期限の応募団体も、まわりがすべて変わっているのに、私は相変わらず「サポート通信」を書いて10年という歳月が経っていたのです。なぜ？ 言ってみれば楽しかったからです。

仕事で取材をしてまとめることはよくあるのですが、千代田の区民、企業人、学生、プロもアマも含めていろんな人たちが次々に活動のプレゼンをし、議論し、審査し、審査される、しかもすべてオープンの場合という一連のドキュメンタリーは、私にはとても新鮮でした。特に審査委員の先生方と参加グループメンバーとのやり取りが、厳しくもあり優しくもあり、なかなか魅力的でした。私は単なる記録者にすぎないのですが、何よりも、しだいに成長していく人間の姿を目の当たりにすると、予期せぬ感動がありました。

### ■オオバケしたグループ

この10年間で、私が見染めたグループはたくさんありますが、詳しいことは『さぼてん WALK SHOP』に譲ることにします。何しろ、この記録誌を開くと、懐かしい面々が次々に現れます。そして、初代の審査委員たちの間で、思わず発せられた「オオバケ（大化け）したね」という言葉を、今、懐かしく思い出します。

それは、わずか1年か2年の間に、誰も、おそらく当の本人たちも予想もしなかったくらい、活動が飛躍的に発展、進歩したグループを表現した言葉です。3年目を終わったグループの修了式の時に、いつも厳しい注文をつけていた審査委員が涙ぐんでいました。それを見て私も思わず胸が熱くなった覚えがあります。

それはそれとして、何といても、千代田まちづくりサポーターズクラブ（CSC）の誕生ほどオオバケしたも

のではないでしょう。これは画期的なことだと改めて私は深い感慨とともに思います。サポート事業の助成を受けたグループのメンバーが、サポートを卒業してからも、このサポートを受ける人たちをさらにサポートしようというのです。卒業したはずの面々が、またチームとなって共に活動を続けていこうというわけです。すごいことです。



「さぼてんWALKSHOP  
まちづくりの現場を歩  
く5年の記録」千代田  
まちづくりサポーター  
ズクラブ編集発行  
2008/11/11

### ■優れた先達者は4頭立ての馬車

「公開審査会」という市民活動助成のシステムは、すでにあちこちに生まれて、その各地のシステム同士が交流しようという動きも始まっているそうです。よく「千代田ならではのもの」とか「千代田はレベルが高い」という声を耳にしました。それが、10年も続いているということの驚き。「新しい公共」を目指して、このようなことを始めた人たちが、この千代田にいたという事実。これもすごいことです。

何事も最初が肝心です。4頭立ての馬車でのスタートの土台づくりがしっかりしていたのだと思います。審査委員として最初に招かれた4人の先生方がすばらしかった。A先生がびしゃりと鋭く突っ込めば、B先生がそれとなくふわりと受け止めてフォローする。そのコンビネーションが絶妙でした。会場からは溜息やら、笑いやら。

たとえば、「最初にきちんと申請書に書かないとだめ。書かなかったけど、途中から思いついたのでやりました、ではだめです」、「活動がNPOになればいいというものではありません」、「それで、いったい地域の人たちとはどんな交流がうまれたのですか?」、「3年でサポートを卒業して、その後を考えてください」等々、今でも心に残っ

ている厳しい、しかし当を得た言葉。それでいながら、「このサポート事業は、切り捨てるのではなく、育てるためのものです」という温かなコンセンサス。

この4人を選んだ事務局の見識の高さに舌を巻きました。決して現状に甘んじることなく、常にその先を読み、さらなる活動の上を目指す。その導き方が見事で妥協がない。しかもそこには愛情があふれている。だから人々はそれについて行く。愛の鞭を受けて返しながら前進していく人たちのパワーにも、私は目を見張りました。

この導き手と受け手の伝統が、両方とも受けつがれてこそこの10年なのだと思えます。そして、それを支え続けた事務局もまた、最初の志を受け継いできたのです。

## ■『走れ!まちづくりエンジン』の出版



一冊のすばらしい本が生まれたのは、4年前です。千代田まちづくりサポート会議+卯月盛夫・北沢猛・森まゆみ・平岩千代子編著の『走れ!まちづくりエンジン』(株式会社ぎょうせい刊)です。

この本の編集に関わったことは、私の望外の喜びでした。現在サポーターズクラブを牽引している三原久徳さんや山岸勇一さんも大変な努力を注いでくださった本です。この中に、千代田に生まれたこのシステムの始まりから、およそそれまでのすべてが書かれているといっても過言ではありません。おそらく、これから始めようとする人々には、またとない市民活動のバイブルと言ってもいいと思います。

ところが残念なことに、すでに絶版とのこと。私の手元にも、最後の2冊があるのみです。ぎょうせいの編集部に問い合わせたところ、やはり復刻版の可能性はないということで、当時の担当編集者も残念そうでした。マスメディアは映像や音声为中心になり、活字文化の危うさが指摘されていますが、本創りに関わるものとして、寂しい限りです。

それだけに、お祭り野郎の集団といわれた神田倶楽部が『明神さまの氏子とお神輿』という立派な本を出版したことや、いくつかの若い学生さんのグループが活動を本にまとめたことなどには救われた思いがいたしました。

## ■未来へ向けての期待とエール

もちろん、これからのことを考えると、課題もいろいろあるでしょう。「新しい公共」として、市民活動と行政をどう繋げていけるのか。学生の団体の参加が増えるのはうれしいものの、大学の卒業後活動をどう後輩に伝えていくか。何より、さらに地域に根付かせるにはどうすればいいか。子どもたちや高齢者の活動はいかにして支えるか。これまでも度々問われてきたことです。

しかし、同じ10年を歩んできたといっても、サポーターズクラブの方々とは異なり、いわば傍観者の私には、解決に向けた具体的なことは何も言えません。ただ、私はサポートのみなさまへ、敬愛の気持ちを込めてエールを送りたいと思います。

「若者よ大志を抱け!己の利益や名誉のためではなく、生きることの意味を追求し、それを深めるために」とは、私の好きなクラーク博士の言葉ですが、私は、あえて言いたい。若者のみならず「中高年よ、市民よ、大志を抱け!」と。そして、「大樹に寄らず、自らの足で市民の誇りと真の豊かさを求め、仲間たちと歩まんがために」と続けたい。

そのためにこそこのチームプレーを、そしてグループ同士の、市民の連帯を期待します。さらに、住み良い千代田のためのみならず、全国に向けて、活動の輪を広げてほしい。そのような力こそが、困難な時代を切り開いてくれると信じております。私も微力ながら、より良い「サポート通信」を目指し、お手伝いしていきたいと思えます。



\*千代田まちづくりサポート通信：平成10年3月31日に第1号を発刊。平成21年2月現在までに全19号を発刊している。全19号すべてが柏原氏の編集によるものである。

千代田まちづくりサポート10周年記念事業

賛助会員一覧

法人会員

金融

興産信用金庫  
大和証券株式会社 本店営業部  
株式会社東京都民銀行 神田支店  
株式会社東日本銀行 飯田橋支店  
みずほ信託銀行株式会社

建築土木

株式会社大林組 東京本社  
大林道路株式会社 関東支店  
鹿島建設株式会社 東京建築支店  
五洋建設株式会社  
清水建設株式会社  
大成建設株式会社  
株式会社竹中工務店  
中央建設株式会社  
株式会社ナカノフード建設  
前田建設工業株式会社

不動産

エヌティティ都市開発株式会社  
協永株式会社  
株式会社久保工  
住友不動産株式会社  
三井不動産株式会社  
三菱地所株式会社  
安田不動産株式会社

緑花・環境

日産緑化株式会社

広告代理

株式会社フィレール

電気・通信

ウェブリオ株式会社

建築設計

株式会社アール・アイ・エー  
株式会社アイテック計画  
株式会社ADプロジェクト  
株式会社関東設計  
株式会社共立エステート  
株式会社楠山設計  
社団法人東京都建築士事務所協会 千代田支部  
株式会社都市環境計画研究所  
パシフィックコンサルタンツ株式会社  
株式会社ポリテック・エイディディ  
株式会社ラウム計画設計研究所

コンサルタント

NPO法人都市住宅とまちづくり研究会  
NPO法人マンション管理支援協議会  
株式会社三菱総合研究所

その他

秋葉原商店街振興組合  
秋葉原中央通商店街振興組合  
株式会社イサミヤ  
神田古書店連盟  
株式会社デザインファクトリー  
東洋美術印刷株式会社  
フィールファイン株式会社  
富士ゼロックス株式会社  
プラットフォームサービス株式会社  
株式会社メディアリンク  
ヨシモトボール株式会社

個人会員

青木 孝次  
安孫子政夫  
阿部 武志  
安藤岩三郎  
池 俊郎  
伊澤 優  
伊東 敏雄  
犬伏 真  
今川 守  
浦田 泉  
岡田 貫伍  
角地登志子  
加藤 武夫  
北澤 悦子  
木村 進一  
小林 勝彦  
小山 政士  
清水 玲子  
須藤 昭雄  
瀬川 昌輝  
立山 光昭  
田村 崇彰  
塚越 茂  
戸田 豊重  
中川 典子  
二木 憲一  
野間 善治  
早川 平典  
藤本 琢巳  
堀部 剛正  
松島 弓子  
松波 道廣  
三浦 博子  
三原 久徳  
宮 健太郎  
宮寺 孝臣  
三輪 瑛子  
山崎 泰廣  
渡邊 和  
他13名

平成21年1月末現在



キャラクター「千代助」

<千代田まちづくりサポートの概要>

- 助成対象** 千代田区を中心とした市民レベルのまちづくり活動
- 助成額** 年間総額約400万円。1団体あたりの助成額は、トライアル部門は一律5万円、一般部門が5～50万円(最長3年間)で、申請内容を公開の場で審査し、助成額を決定します。
- 応募資格** 3人以上のグループで、千代田のまちづくりに関する活動であれば、在住、在勤、在学、国籍を問わずどなたでも応募できます。政治・宗教・営利を目的とする活動は助成対象にはなりません。
- 年間スケジュール** 助成活動募集(5月)、公開審査会(6月)、中間発表会(11月)、活動成果発表会(3月)
- ※本事業の助成金は、当財団の賛助会員の方々の会費によって賄われています。

千代田まちづくりサポート10周年記念事業

---

## 『企業との新たなつながり』

発行 平成21年2月  
財団法人まちみらい千代田 企画総務グループ  
〒101-0054 東京都千代田区神田錦町三丁目21番地  
ちよだプラットフォームスクエア4階  
電話：03-3233-7555 FAX：03-3233-7557  
E-Mail：info@mm-chiyoda.or.jp  
URL：http://www.chiyoda-days.jp/ (千代田day's)

制作協力 株式会社 好作



主催 財団法人まちみらい千代田  
協力 社団法人日本フィランソロピー協会  
プラットフォームサービス株式会社